

さらば、千秋の青春と一日の生命よ。

漫珠沙華

魔法協会から依頼を受けて、アンバーはこの森を訪ねてきた。

この世界は不思議な力、魔力で満ちている。時折、魔力が大量に噴き出している場所がある。この世の秩序たる魔法協会は“霊脈”と呼び、数年に一度のスペンで調査員を派遣している。今回はアンバーに白羽の矢が立ったというわけだ。協会から与えられた前情報、それからアンバー自身の調査を統合すると、この土地が霊脈となったのは、昔からドラゴンが住み着いているかららしい。そして、屋敷があり、代々世話をしている人間がいる、とも。

「先生！」

後ろから足音がする。振り返ると、生徒兼お目付け役のビリジアンがいた。

「あんまり先行かないでくださいよ。追いつけなくなる」

「やあ、すまないね」

青年と少年のちょうど狭間のような容姿をした彼は、大きなトランクを持っている。アンバーが開発したもので、どん

な物体でもその体積と質量を無視して収納できる。生産コストが高すぎて実用化には至っていないものの、私的に使うのであれば十二分だった。

「で、ここが目的地ですか」

「正確には森の先の屋敷なのだけれどね。屋敷の主が霊脈の管理者だから、前回の調査時から変わったことがあるか聞かなければならない」

ビリジアンはなるほどとこぼし、トランクを持ち直した。それを見てから森に踏み込む。街とは違い整備がされておらず、木の根が露出していた。木々は鬱蒼と生い茂っており、昼間なのに薄暗い。

「ほんとうにこんな奥に人なんているのですか」

「いるらしいね」

段差を降りたり、野生動物と戦ったり。そんなことを繰り返して歩いていると、突然視界が開けた。

古びた門と、屋敷が見える。庭はよく手入れされているように見えた。

「ここですか？」

ビリジアンはトランクの持ち手を握りしめながら尋ねた。

「そのようだね。今は君よりも少し年上ぐらいの子が一人、住んでいるみたいだよ」

「それは、前回の報告書の情報ですか？」

「そうだよ。名前はサンセットというらしい。早速中に入ってみようじゃないか」

門は開け放たれている。森の奥深くにある不気味な館に好んで関わりとうという人間は少ないからか、防犯意識のぼの字もない。

「魔法協会の者なのだけれど」

そう呼びかけると、遠くの草木の陰からひよっこり顔が出てきた。特徴は聞いていた情報と一致する。サンセットだろう。

「あいよ、ちょっと待ってくれ」

そういえば、彼はこの広い庭の管理を一人でやっているらしい。森の近くに住む住民からは「庭師伯爵さま」などと呼ばれているようだ。

青年は実にラフな格好だった。確かに庭仕事には適しているが。

「こんな服装で申し訳ない。俺はサンセット。この屋敷、と霊脈の管理人だ」

「よろしく。僕はアンバー。魔法協会から依頼されてきたよ。こっちは僕の生徒のビリジアン」

「よろしくお願いします」

サンセットは快活な笑いを浮かべながら、「アンバーさんに、ビリジアンさんか」などと二人の名前を反芻した。

「なに、お堅いことはやめにしようじゃないか。僕のことでもビリジアンのことも呼び捨てでかまわないよ。いいかい、ビリジアン」

「構いません」

「じゃあそうさせてもらうな」

今日と明日はそちらに泊まって調査することを伝えると、彼は少し考える素振りを見せてから「いいぜ」と承諾した。「客室があるんだ。最近使っていないから掃除しなきゃならねえが、少し待ってもらえるなら」

「それはありがたい。日没までには戻ってくるよ。少しこの辺りを調査したいから」

「いや、待て。森だから、日没より暗くなるのが早いんだ。気を付けな」

「親切にどうもありがとう。善処するよ」

微笑んで応じると、ビリジアンが下から「先生の首根っこはおれが掴んで戻しますので」などと実に頼もしいことを言ってくる。

「俺としても、せっかく訪ねてくれた客人が一晩のうちに、とかはちょっと遠慮したいからな」

ビリジアンがじとりと睨んでくるのを微笑みでいなしながら、アンバーはすでに意識を調査の方にかつとばしていた。

「じゃあ、またあとで」

「おうよ」

そこでサンセットとは別れた。名の通りの、薄いオレンジの美しい髪が揺れて、大きな屋敷へと吸い込まれていった。その背中を見送って、師弟も歩き出す。

「ドラゴンに対する警告はありませんでしたね」

「そうだね」

普通、ドラゴンが周囲に住んでいるなら一言二言警告があつてしかるべきなのに、しなかった。

「人とドラゴンの関係について、前に渡した教科書に書いてあつたね。言えるかな」

「はい」

ビリジアンはトランクを持ち直した。深い緑の瞳が木々の間を見やる。

「ドラゴンは古代から強大な魔力を持ち、住み着いた場所が霊脈になることも多いです。使う魔法も攻撃的で強力です。彼らは人間をも餌としており、魔法協会に討伐依頼が舞い込むことも少なくありません」

「素晴らしい、よく覚えているね」

「ありがとうございます」

魔法でばふばふと小さな爆発で祝った。彼は率直な褒め言葉に彼は頬を赤らめて応じる。

「それで、先生。サンセットは何故ドラゴンに対する警告を

しなかったんですか」

「ふむ」

アンバーは顎に手をやって考えた。前の調査報告書は実務的で、前回と比べた魔力の数値変動ぐらいいしか書いていなかった。サンセットも名前、性別、年齢ぐらいいしかわからなかったのだ。おそらく書いた本人は興味がなかったのだろう。

「推測はできる。サンセットくんの先祖がドラゴンを腕つぷしで言うことを聞かせた。ドラゴン自体が穏やかで人間を食べることを好まない。このあたりかな」

「どれもありえなくはない、のか？」

「まあ、人間とドラゴンが共存することこそ、そもそもありえないからね。とにかく用心することに変わりはないよ」

警告がなかった理由は、もちろんその必要がないから。

ではなぜ？　そこがわからない。

警戒はしておくに越したことはない。

「ビリジアン、魔力測定用の装置を出してくれないかね。トランクを置いて、念じるだけでいい」

彼はトランクを地面に置いて、鍵を外した。トランクをばつくりと開けないように気を付けながら、手を突っ込む。

「ん、ん。あ、何か掴みました」

「引っ張り出してくれ。手放さないように」

ビリジアンが腕をトランクから引き抜くと、それには一つの水晶玉のようなものがあつた。

「そう、それで合つてる。ありがとうビリジアン」

「いえ。これも、先生が作ったのですか？」

「そうだよ。基準は魔法協会のものに合わせているから、安心しなさい」

起動の呪文を唱えると、水晶玉は淡く輝いて、宙に浮かび上がった。

「この色で魔力の量と質、それから簡単な霊脈の源のありかが分かるんだ」

「自分で動いてくれるから、両手が空いていいですね」

彼はトランクを閉めて立ち上がる。

「じゃあ行くか。恐らく霊脈の源は向こうにある」

水晶玉はゆっくりと動き始めた。二人はそれについていく。

「暗くなる前に、帰れるといいんですけど」

「それまでには終わらせるとも」

水晶玉の案内はめっちゃくちゃだった。なにせふよふよ浮いているから、地面を歩かざるを得ないこちらは無視して進んでいく。大きな木を軽々と飛び越える間に遠回りをしないといけないし、見上げるような段差でも待つてくれない。

体力のあるビリジアンはともかく、普段調査以外で外に出ないアンバーはすでにへろへろだった。

「次からは人間にとって最適なルートを選択できるように改良しなければ」

「先生がバテるのが早すぎるんですよ。帰りどうするんですか」

「君におぶつていつてもらおうかな」

「嫌です、みつともない」

ばつさり切り捨てられ、アンバーは苦笑いしながら眼鏡をかけなおした。

「そろそろ着かないと、帰りで僕が倒れるのだけれど」

「先生、水晶玉が止まっている」

前を行くビリジアンに言われ、顔を上げる。水晶玉は澄んだ輝きを放つて静止していた。

追いつけば、そこは湖だった。

「うん、質・量ともに最上級。ドラゴンが住んでいるとはいえ、こんなにも質がいいのは珍しい」

ビリジアンに羊皮紙と羽ペンを取り出してもらい、呪文を唱える。すると、羽ペンはひとりでに動き出してつらつらとレポートを書いていく。

「レポートが済んだら早めに帰ろう。ドラゴンに襲われたらさすがに対処は難しい」

「魔力探知の結果を張っておきます」

彼は呪文を唱えて結果を展開した。周囲に淡い緑色の膜が

張ったように見える。

「うん、ありがとう。これで集中できる」

「何か来たら知らせます」

ビリジアンがそう言いつて辺りを見回した瞬間だった。

——ぱき、ぱりん。

音がして、緑色の欠片がきらきらと空気に溶けて消える。

「五時方向です、先生」

いまだに慣れていなかったとはいえ、結果が破壊された。十中八九ドラゴンだろう。一旦レポート作業を中止して、様子を探る。低木がさがさと動いた。ビリジアンは一步前に出て、上着に隠してある暗器に手をかけた。

物陰から出てきたのは人間だった。腰まである長い髪が艶めいているが、体格は明らかに男である。

「やあ。君たちが、サンセットのお客さんかな？」

二人は顔を見合わせた。

「あ、僕はホライズン。ここに住んでるドラゴンだよ。別に、君たちに害を加えようだなんて思っていないよ。サンセットがね、魔法協会からお客さんが来ているって聞いてね」

「どうします、先生」

アンバーは一瞬悩んだ。人間に擬態するドラゴンは聞いたことがある。けれども、それは人間を効率よく捕獲するためだ。考えようによつては、このドラゴン——ホライズンがた

だ自分たちを欺くためにサンセットの名前を出したとも考えられる。

けれども、サンセットは別れ際になんの警告もしなかった。

これはつまり——本当に考えられないことだが。

「ホライズン、だったか。一つ聞いても？」

「いいよ」

「君にとつて、サンセットくんは？ どういう存在かね」

そう尋ねると、彼はきよとんと目を丸くしたのち、「どうつて」と考え込んだ。

ここで、ただ人間を食糧として見ていただけなら、「大切な人」という曖昧な言葉が出てくる。

「先生」

咎めるようなビリジアンの声が飛んでくる。

「——なんだろうね。ちよつと、分からないや。強いて言えば家族、なのかな」

家族。意外な答えに、アンバーはどこか安堵した。

「これで、君たちからの信用は得られた、かな？ サンセットがそろそろ日暮れだから戻ってきて言つてたよ」

「……」

結局、警戒するだけ損だったようだ。アンバーたちは、ホライズンの案内で屋敷に戻ることにした。

「そういえば、二人の関係つて？」

歩いている途中、ふとホライズンが尋ねてきた。

「僕がビリジアンの師匠、という感じかな。僕が世の中のあるそれとか、読み書きとかを教える代わりに、外出する際に護衛をしてもらう」

「護衛？ 守ってもらうの？」

「そう。僕は色んな魔法を知っているけれども、自分の身を守るのは不慣れだからね。その点、ビリジアンなら武器の扱い方を心得ている」

ね、と顔を見れば、ビリジアンは「ええ、まあ」と曖昧にうなずいた。

屋敷まで戻ってくると、懐中時計と睨み合いをしていたサンセットが玄関にいた。

「遅えよ、夕飯もうできてんぞ」

「ごめんごめん、ちょっと手間取っちゃって」

「僕らがつい警戒してしまっただけ」

「あ、そういや、俺もホライズンのこと話してなかったな。悪い」

「いいよ、代わりに君たちのことを教えてくれないかな」

そう尋ねると、サンセットはきよとんとしたのちに「ああ」と破顔した。

「まずは荷物を置いてこいよ。ホライズン、客室まで案内頼めるか」

「わかった。さあ、こっちだよ」

ホライズンに連れていかれた先は、一つの部屋だった。ベッドが二つ、椅子と小さな机が一つずつ。埃はなく、シーツも真新しい。窓際には花瓶が飾られていた。

「上着はそこに掛けてくれて構わないからね」

ビリジアンはカーペットの上にトランクを置いたあと、肩を回した。

「そんなに重いものだったの？」

「かなり重いですよ。いろいろ入ってますからね」

「ふうん」

彼に脱いだ上着を手渡す。

「そうそう、夕飯はいつもサンセットが作ってくれているんだ。美味しいよ」

「思ったのだけれど、この屋敷に住んでいるのはサンセットくんだけなのかね」

ホライズンは悔しそうに笑って、「そうだよ」と答えた。

「昔はサンセットの両親もいたのだけれど、最近死んでしまったんだ」

最近。

「それって、何年前なんですか」

「ん？ えーっと、十だったかな。いや八かも。ごめんね、僕らドラゴンって基本的に長生きだから、人間みたいに細かい年月は気にしないんだ」

「じゃあ、わりと若い年から、こんな広い屋敷にふたりで暮らしているわけなんですわね」

「うん」

ホライズンはふわりと微笑んだ。ビリジアンは一瞬とはいえ見惚れていたらしく、ぱっと顔をそらす。

「まあまあ、早くサンセットくんのところへ戻ろうか。せつかくの夕飯が冷めてしまう」

「わあ、それは困るよ。ご飯はあつたかい方が美味しいからね」

こっちこっち、とまるで幼子のように振舞うホライズンに微笑みながら、彼のあとをついていった。

食卓には、豪華な料理が人数分並べられていた。色とりどりの葉野菜をふんだんにつかったサラダ。そのうえには白身からじゅわりと黄身が溶けだしているポーチドエッグ。じゃがいも、ブロッコリーなどの野菜がごろごろ入っているシチュー。そして、今晚のメインはふかふかのブレッド。

「わあ、美味しそうですね」

育ち盛りのビリジアンは目を輝かせた。

「これを全て、サンセットくんが？」

「勿論だ。あんまり客も来ねえから、つい作りすぎちゃったな」

「そんなことないですよ。ほら先生、ホライズンさんも。座って食べましょうよ」

瞳をきらきらさせながら席に座る。早く早くと親の手を引いて走る幼子のように、アンバーは思わず微笑んだ。

「じゃあ、いただきようかね」

椅子を引いて座った。

「僕も僕も。サンセットのご飯、いつ食べても美味しいんだよね」

「そりゃ参ったな、ここ数年わりと自己流だからよ」

「お先にいただきます。うん、美味しい！」

サンセットは照れ臭そうに頬を掻く。その光景を見守りながら、アンバーも食事に手をつけた。安い食事処よりも、はるかに美味しい。丁寧に調理されている。

「お店よりで食べるよりも美味しい！ 量もあるし。あ、いくら払ったらいいですか？」

「いやいや、お代なんていらねえよ。そもそも俺が好きで作ったんだからよ」

「！」

その一言にビリジアンが目をさらに輝かせた。

無理もない、アンバーとともに調査に行く時は安い食事処

のまずい飯を食うか、街の外であればそこらへんで採った魚や肉なんかを焼いて食べていたのだから。

「材料は全て、このあたりで？」

「肉は森の中に猪やらがいるから、そこで。野菜はここで栽培しているのと、たまに街の方に買いに行く」

「今夜のお肉はね、僕がとったんだよ」

ふふんと高い鼻を鳴らしながらホライズンが言う。確かにドラゴンは人間が束でかかっても勝てるかどうかかわからないほどの高い戦闘力を有しているが、勢いあまって獲物を丸焼きにしてしまいそうだ。

「あ、疑ってますって顔してる。大丈夫だよ、きちんと手加減したから。僕は他のドラゴンと比べて器用だからね」

「いつもありがとな、ホライズン」

「いえいえ」

確かに今この瞬間、アンバーたちと食卓を囲んでいるのはひとりの人間だ。

ホライズンの姿は、確かに人外めいている。けれども、今まで見てきたどんなドラゴンの擬態よりも遥かに精度が高い。

人間をたくさん観察してきた、証左だろう。

「ええと、先生？ 僕に、食べかすでもついているかな」

「ああすまないね、ただ、人間とここまで親しいドラゴンは

見たことがないから、気になって」

「僕はここ数百年ぐらいいかな、人間を食べようとは思っていないよ。人間の肉は、猪とかよりちよっと酸っぱいみたい」

そう言っただけでホライズンは首をすくめた。

「酸っぱいんですか」

「うん、酸っぱい。みかんとか、りんごとは違っていやなすっぱさ」

アンバーは今すぐ記録したかったが、さすがに食事中なのでやめておいた。

サンセットは街に出かける以外ここから出ることがなかったようで、魔法協会や外のことを聞きたがった。アンバーがあれこれ説明してやると、彼は嬉しそうにその次を尋ねた。

「ほら、早く食べないと冷めちゃうよ」

もっともつと話を聞きたがるサンセットをホライズンがなだめて、話はまたあとにしようということになった。

夕飯を食べ終わったあと、二人は客室で寝ることにした。

「明日また、ホライズンくんも交えて湖の調査に行こうと思うんだ」

「そうですね。なら、早く寝ないといけませんね。先生、今日はお疲れでしょうし」

ビリジアのじつとりとした目にアンバーは思わず苦笑した。

「手厳しいなあ」

手元のレポートを見直す。魔法協会からは「前回の調査が
ずさんすぎるのでよくよく調べてこい」と言われていたので、
いつもより事細かに書かなければならない。

「じゃあ、僕ももう寝ようかな。明かりを消すよ」

そういうとビリジアンはもそもぞと布団に潜った。アンバ
ーもベッド際の明かりを消して布団をかぶった。

しばらくしても、寝付きのいいビリジアンの寝息が聞こえ
ない。

「どうかしたのかね」

尋ねると、少し間が空いて、

「先生」

と返ってきた。アンバーは口を噤んで続きを待つ。

「体ぐらい、鍛えた方がいいですよ。おれがずっと守れるわ
けじゃないし」

寝返りの音がする。

「おれは、誰かを守ることは向いていないし」

そこでまた静かになって、痛いほどの静寂が残った。

「ビリジアン」

呼びかけると、布のかたまりがびくりとはねる。

「君は、誰かを傷つける方法をよく知っているね」

「ええ、はい。先生と出会うまでは、ただの暗殺者で、名前

もありませんでしたから」

「そうだね。——いいかね、よく覚えておきなさい。人を傷
つける方法を知っているのは、人を守る方法を知っているの
と同じなんだよ。ビリジアン、君は僕を守ってくれている」

彼は小さく鼻をすすって、そうですか、とだけ返した。

またしばらくして小さな寝息が聞こえてきたので、アンバ
ーも目を閉じることにした。

翌朝、目が昇るとビリジアンが動き始めたのでそれでアン
バーも目を覚ました。朝食もサンセットとホライズンが用意
してくれている。

ビリジアンは寝ぐせがついたままの頭で着替えている。ネ
クタイがうまく結べずに首をかしげた。

「ほら、貸してみなさい」

そうやって結んでやると、彼は緑色の瞳をぱちくりと瞬か
せた。

「こ、これくらい自分でやれますす！」

「ふふふ、そうかい。悪いことをしたね」

「でも、ありがとうございます。代わりに、先生の着替えは
おれがお手伝いしますから」

「助かるね。お願いしようかな」

アンバーはビリジアンに髪を結んでもらい、いつもの服装に着替えた。

ちょうどそのタイミングで、戸をノックする音。

「おはよう、ホライズンだけど。二人とも、起きてる？」

「おはよう。今しがた着替えが終わったところだよ」

「なら良かった。ちょうど朝ごはんができたんだ、食べにきてね」

窓の外を見ると、眩しいほどの晴天が広がっていた。

朝食を食べてすぐ、二人はホライズンとまた湖に行くことにした。サンセットも誘ったのだが、庭仕事があるからと断られてしまった。

ホライズンの案内してくれたルートは初日の水晶玉なんかよりもずっと親切で、遠回りではあるがアンバーも息が切れなかった。

「昨日はゆっくりできなかったからね。今日こそ調査しなければ」

魔法協会に報告するためだけではなく、最近行き詰まっていた道具の研究にも何かインスピレーションが得られるかもしれない。

「それと、ホライズンにもいくつか聞きたいことがあるんだ」「え、僕に？」

ホライズンは首を傾げる。

「うん。いつからここに住んでいるのか、どうして人間を食べなくなったのか、とか」

「あゝそれかあ。確かにサンセットと一緒に聞きにくいことは多いものね。じゃあ、僕がここに住むことになったきっかけからかな」

うーん、と彼は顎に手をやって唸る。何かを思い出しているようだ。

「昔からここにいてね。近くに街があるでしょ？　そこで人間を襲って食べてたんだ」

ここに来る前、そこには寄った。もちろんドラゴンのことも聞いて回ったが、人々はみな「こしばらくはドラゴンに襲われたことなどない」と言っていた。

ホライズンの目は、森の木々ではない、どこか遠くを見つめていた。

「そこで、ある日一人の人間にこてんぱんにされてね。うんまあ悪い話——これはサンセットには言わないでほしいんだけど——好きになっちゃって」

「あらら」

「おやおや」

彼は苦笑いをして、赤くなった頬を掻いた。ただの、初めての恋をする少年のようだった。

確かにサンセットには伝えたくはない話である。人間を襲

って食べていた拳句、ひどくやられた相手に恋をしてしまったことなど。

「まあ、一緒になりたかったんだけど、人間とドラゴンだからね。あの人は他の人と一緒になって、それであの屋敷で、死んじゃった」

ビリジアンは屋敷のある方角を見た。

「亡骸をお墓に埋めて、ふと思ったんだ。この人の子孫なら僕が守らなきゃなって」
鼻をすする気配がした。

「それで、もうずっとここにいるんだ。——サンセットは、あの人に、よく似てる」

「似てるんだ」

「目つきとか、笑った顔とかね」

眉を下げて、困ったように笑う。風がざあっと通り抜けて、辺りの木々を揺らした。

「違うって、わかってはいるんだけど」

「ホライズン……」

そうして話していると、湖が見えてきた。ビリジアンが持っていたトランクからレポートと羽ペンを取り出して、続きを書かせる。

「魔法協会に報告って言ってたよね。なにを報告するの？」

「ここの簡単な地形と、霊脈として成立した経緯、管理して

いる人間の情報、かな」

「それは、どこまで？」

大きな彼が背中を曲げてまでアンバーを覗きこむものだから、思わず笑ってしまう。

「なに、いや、君がサンセットのご先祖様に恋をしてここに住んでいるってことまでは書かないさ。安心しなさい」

「よ、良かった」

「このことは僕らが覚えているだけにしよう。いいね、ビリジアン」

「もちろんです」

恋。——恋、か。

人とドラゴンの純愛恋愛譚なんて、どこを探しても見つかりはしないだろう。

羽ペンが記録している間、ホライズンとビリジアンが湖で魚を数匹釣っていた。人間とドラゴン、決して相いれることはないとされてきた。しかし、どっちがたくさん獲ったのか大きいのを釣ったのだと笑い合う姿は、ただの友人のそれだ。見ると、レポートはあらかた終わっていた。

「じゃあ、魚を焼いて食べてから戻ろうか。屋敷で少し資料を探したいのだけれど」

「それなら書庫があるよ。鍵は玄関にあったはず。僕は夕飯の材料を調達しなきゃいけないから、サンセットに聞いてみ

て」

「そうさせてもらおうかな」

魚には脂が乗っていても美味だった。調理を担当した
ブリジアンが「塩を持ち歩いていてよかったです」と笑って
いた。

屋敷に戻ると、サンセットが花壇でしゃがみこんでいた。
おそらく雑草を抜いていたのだろう。彼はアンバーたちを見
て目を丸くする。

「悪いな、まだかかるんだ」

「それなら僕たちがやるよ。サンセットくん、君は昼食もま
だだろう」

「悪いな、本当に。じゃあ俺は厨房でサンドイッチでも作っ
て食べるか」

彼は一度伸びをして屋敷の方に向かった。その背中を、ホ
ライズンは笑顔で見送っている。

「綺麗な花壇ですね。これを全部、サンセットが？」

「うん。僕も手伝うんだけど、基本的にはあの子がやってる
よ。種を植えて、お世話して、収穫するところまで、全部」
見ると、花だけでなく、野菜や薬草なども栽培しているよ
うだ。

「庭、綺麗でしょ？」

ホライズンが尋ねる。

「ええ、ええ。とっても綺麗です。色んな人に見てもらえな
いのが残念なぐらいです」

「ブリジアンの言う通りだね。低木もきちんと整えられてい
る。一人じゃ難しいだろう」

「うん。ずっと昔から、この庭は綺麗なんだよ。それこそ、
あの人が住み始めた時から」

あの人が屋敷を建てて、庭も整えて、それを子孫たちが今
日まで保ち続けている。

そして、サンセットも。

「ずっと、この景色が見られたらいいな」

ホライズンは無邪気につぶやいた。

「さ、早く終わらせようか。サンセットが戻って来たとき、
びっくりさせたいな」

「三人なら早く終わらせられるよね。さ、始めようか」

ふと空を見ると、厚手の雲がこちらに迫ってきていた。水
やりはいらないでしょうね、とブリジアンがつぶやいた。

水音でアンバーは我に返った。まず外に繋がる勝手口が見
えて、そこから書物が詰められた本棚、不思議そうにこちら
を見る二人の生徒。うたたねをしていたようだ。

夕食を終えて、夜の書庫。外では雨が降っており、どうや

ら雨が窓に打ち付ける音で目覚めたようだ。この辺りに関する書物が見たいとサンセットに言えば、彼は快諾してくれた。ついでにホライズンと一緒に言えない話を聞かせてくれと頼み込まれてしまい、あれこれ話していたのだ。

「すまないね、寝ていたようだ」

「いやいや、先生は普段散歩くことないんだろ？ 慣れてないことをやれば誰だってそうなるさ」

サンセットはからりと笑って見せる。

「で、続きを聞かせてくれよ。この外、ホライズン以外のドラゴンのこと」

「ドラゴンに興味があるのかね、君は」

「ん、まあな。ホライズンが変わったドラゴンなのはなんとなく分かるけど、どういう風が変わってんのかは、他のドラゴンを知っている人から聞くのが一番だろ？」

「そうだね。ホライズンくんのように、人間を食べないどころか庭仕事を手伝うなんて聞いたことがないからね」

「優しいからな、アイツは」

サンセットは頬杖をついて、瞳を細めた。

「かっこよくて、親切で。頼み事してもやな顔せず頷いてくれるんだよ」

大切な宝物を自慢するような口ぶりに、頬が緩むのを感じる。

「あ、先生、そんな顔しないでくれよ。恥ずかしい」

「いや、なに。かわいらしいものだなと思ってね」

「別にそんなんじゃないやねえよ。ただ、ホライズンさ、たまに俺を見つめるとき、すごく懐かしそうな顔すんだよ。」

思わずビリジアンと顔を合わせた。

「それがなんなのかわかんねえけど、寂しいっていうのは、なんとなくわかる。だから、俺がそばにいたいなって思ってる。外には出てみたいけどよ」

サンセットはごによごによと口の中でつぶやいたかと思うと、その場に突っ伏した。

「ああ、もう。昔っから隠し事は苦手なんだ。こう見えて、ホライズンのことが好きだよ。そういう意味で、だ」

またビリジアンと顔を合わせる。ホライズンはサンセットの先祖に恋をして、サンセットはホライズンのことが好き。

「人とドラゴンってことはもちろん分かっている。けどよ、それ以上にもう、どうしようもないんだ」

二人は押し黙った。おそらくは彼の初恋で、眩しいほど純粹である。

沈黙に耐えかねたビリジアンが「ええと」と話題を探す。

「ホライズン以外のドラゴンがここに来たことはないんです。街の人に聞きました」

「ああ、そうだよ。めったにどころか、ホライズンが住みつ

いて以来、だな」

「ドラゴンは互いの縄張りには寄りつかないからね。ホライズンくんがいる限り、この街がドラゴンに襲われることはないと言っている」

そりゃ安全だ、と彼は笑う。

「まあでも、外について知っていた方がいい。君ぐらいの年代の場合、学校に行って友人を作って――」

ばたん、と音がした。ホライズンが扉のそばに立っている。人外めいた瞳を大きく見開いて、拳を握っている。

「学校？ 学校って言った？ ねえ、先生」

長い脚をめいっばい開いてこちらに歩いてきた。椅子に座っていた二人ははっと立ち上がる。

ぴり、と背中に電流が走った。ホライズンの纏う空気は、重い。

最悪、死ぬだろう。

「学校って、外の学校だよな。サンセットを連れていくつもり？」

「やめろホライズン、違うんだ。先生は俺のことを思って」
アンバーの視界に、何かが映りこむ。爪、と認識して、と

つさに魔法でバリアを作った。

「先生！」

ビリジアンの悲鳴が聞こえる。甲高い音とともに、粉々に

砕かれた。

「外しちゃった」

ホライズンは、右手のみをドラゴンのそれに変貌させている。

相手は長い時を生きるドラゴン。対してこちらは対ドラゴンのプロではない。アンバーとはいえ、二人もの人間を守ってドラゴンと戦うほど戦闘特化でもない。

「ビリジアン、サンセットくんを連れて逃げなさい」

「でも、先生！」

「君たち二人を守って戦えるわけじゃない。大丈夫、あとから向かうさ」

二人は少しだけ迷った末、ビリジアンが「無事でいろよ、先生！」とサンセットの腕を掴んで書庫から出て行った。

サンセットの目には、涙が浮かんでいた。

「追い掛けないのかい？」

「まずは先生からかな。一番厄介そうだから」

「そうかい」

手中に杖を出現させた。

「さあ、こちらだよ」

勝手口のドアを開けて、外に出る。走るのは苦手なので、魔法を使って宙に浮かんだ。

外はやはり雨風がひどい。黒い髪が視界を邪魔している。

「鬼ごっこ？ いいよ。僕も本気になるのか」

口調こそ穏やかなものの、顔には青筋が浮かんでいる。めきめきと嫌な音がいたかと思うと、そこには穏やかな青年はいない。

ただの、ドラゴンだ。

体長はゆうに五メートルを超えている。

勝算はゼロに等しい。魔法の知識、ドラゴンの知識はあれど、それを戦闘に活かすセンスはないのだ。

「ホライズン。君は、サンセットにずっとあの屋敷にいてほしいのかね」

『そうだよ』

魔法を介して、人間の言葉で喋っている。

『せめて生まれてから死ぬまでずっと見守っていたいんだ。先生、たった数十年だよ』

「知っているだろうけれども、君の言う数十年は、僕らで言う一生なのだよ」

木々の隙間をすり抜けて、なるべくでたらめに逃げる。ホライズンは躊躇いなくその爪で切り裂こうとしてくるので、そのたびにバリアをはったり避けたりしなければならなかった。

『なかなか捕まらないなあ』

「サンセットくんだって、僕が君を傷つけることは望んでい

ないだろうに」

『先生』

ホライズンの爪が、木をとらえた。

『出会ったばかりの君が』

みしりという音とともに、倒される。

『あの子を』

二本目。

『語るな！』

三本目——と見せかけて、一気にこちらを狙ってきた。障壁で弾く。

しかし、これで体勢が崩れてしまった。

「しまった」

地面に無様に転がる。幸い木に当たったことはなかったが、あちこち擦りむいたりぶついたりしてしまったようだ。体中痛む。

やはり戦闘訓練はしておくべきだった。

杖を支えに立ち上がる。骨は折れていないようだ。

後ろを確認すれば、あの湖。

もう逃げることは構わないだろう。

『先生を殺したら、次はビリジアンかな』

杖を構える。障壁をはる余力も残っていない。

彼らは逃げてくれただろうか、とぼんやり考えた。

『それじゃあね。おやすみなさい、先生』

死んだらお墓に埋めてあげるよ。

凧いだ声とともに、爪が振り下ろされるのを見つめていた。目を閉じた、瞬間。

「ホライズン！」

一人の青年が、割って入って来た。爪は止まらず、彼を切り裂く。どざりと地面に倒れるのがいやに遅く見えた。

『サンセット？』

ドラゴンが一步踏み出す。翼が消えた。

ドラゴンが二歩歩み寄る。

そうして彼のそばまで来たとき、ドラゴンは青年の姿をとっていた。

彼はぬかるんだ地面に膝をつく。

「どうして、ああ！」

「先生！」

ビリジアンが走って来た。

「逃げなかったのかね」

「サンセットが、どうしてもって。もちろんおれは言ったんですけど、先生」

肩で息をしている。ずび、と鼻を吸るのが雨音に混ざって

聞こえた。

「ホライズン」

かすかな声がサンセットから聞こえる。

「サンセット、僕は、なんてことを」

「俺はよ、ただ嫌だったんだ。大切な人が、友人を傷つけるのが。だから、お前は何も悪くねえよ」

ごふ、と彼がせき込む。

「ビリジアン、ポーションを」

「はい！」

ビリジアンがトランクを置き、その中に手を突っ込む。

「サンセット、僕はただ、君にどこにも行ってほしくなかったんだ。あんまりにもあの人にそっくりだから、どこにも、外のことも知ってほしくなくて」

ホライズンは頬をびしゃびしゃにして、サンセットに手を伸ばす。雪うさぎを触るように。

「ごめんねサンセット。ごめん」

「ホライズン。俺は、この屋敷のことも、お前のことも好きだよ。だから、もっと知りたい。どうすればこの屋敷をもっと次に繋げられるのか。屋敷が、あの庭が」

こふ、と血を吐き出す。

「もういい、喋らないで！僕は君を傷つける方法しか知らないから、あ、ああ」

嘆くホライズンの横に、ビリジアンがしゃがみこんだ。その手には、青緑色の液体が入った小瓶。

「それは違いますよ、ホライズン」

彼は少し固く封をしてあった小瓶を開けて、中身をサンセットの喉元に流し込む。

「人を傷つける方法を知ってるってことは、人を守る方法を知ってるってことなんですって。これは、先生の受け売りですけど」

「その薬は？」

「肉体が受けた損傷を回復する、僕特製のポーションだ。効果は保証しよう」

「サンセットは、死んじゃう？」

「死なないさ。でも、このままだと体が冷えてしまう」

それなら、とホライズンが顔を上げた。

「近くに、僕の洞窟があるんだ。雨風ぐらいならしのげると思う」

「よろしい。ホライズンくん、サンセットくんを頼めるかい」

「えっ」

でも、とためらう彼に微笑んだ。

「君の力がなければ、サンセットくんを安全には運べないからね」

ホライズンは目元を乱暴に擦ったあと、「うん」と頷いた。

サンセットの体を抱き上げて、アンバーとビリジアンの前を歩く。

「ビリジアン」

「なんですか、先生」

「街からここまで、大丈夫だったかい」

そう尋ねると、彼は一瞬首を傾げたのち、目を大きく開いた。

そして、笑う。

「おれがちゃんと守りましたから」

洞窟は湖の向こう側にあった。ドラゴン体のホライズンが入ってもまだ余裕があるぐらいには大きい。

ホライズンはサンセットを寝かせた。

「か、体、冷えちゃう」

「炎は出せるかね」

トランクからいくらか燃えるものを出す。彼は「うん」と頷いて、そっと火を噴いた。

焚火が、四人を照らし出す。

「――なあ、ホライズン」

サンセットが目を覚ました。ホライズンは子供のよう顔をぐしやりと歪める。

「俺さ、あの庭で色んな植物を育てたいんだ。花だけじゃない、もつともつと役に立つハーブとか。たまに寂しそうにす

る時に使えたらいいなって思ってるんだ」

「うん、うん」

「だからよ、ちよつと数年。いや、いくらドラゴンのお前でもひとりぼつちは寂しいか」

「僕のがままで、君のしたいことを邪魔するのに比べたら、全然だよ」

「そうか、ありがとよ。——外の学校で、学んでもいいか」

サンセットの頬にふたり分の涙が伝う。

「手紙は書く。休みの日には帰るし、卒業したら絶対ここに戻ってくる」

「うん、うん。もちろんだよ、サンセット」

ふたりは互いの手を握り合って、そつと体を寄せて温め合う。

アンバーとビリジアンは、その光景を、ずっと眺めていた。夜明けは近い。

「いいのかい、サンセット」

洞窟で一晩過ごせば、サンセットの傷は回復した。けれども大事をとってしばらく療養するようだ。その間、庭の管理と家事——今までサンセットがやっていたことはホライズンがやるらしい。

アンバーとビリジアンは、屋敷の玄関でサンセットと向かい合っていた。

「見送りさせてくれよ、恩人なんだぜ。ホライズンもそれぐらい許してくれる」

ホライズンは洗濯に出かけている。別れは先程済ませた。彼は一生の別れかもつぶやいていたが、ビリジアンが「先生には長生きしてもらいますから、それこそ死んでも」と言っていた。

何をするつもりなんだろうか。

「今回は本当にありがとな」

「——ホライズンくんことは、諦めるつもりかね？」

そう投げかけると、たちまち彼の顔から耳が真っ赤に染まる。

「い、いや。うん、せめてホライズンが言う、あの人の代わりになれたらな、とは思ってる。でもよ、できれば——俺のことを、見てほしい、って思えるようになった。二人のおかげだ。ビリジアン、あの時俺をホライズンたちのところまで連れて行ってくれてありがとな」

「いえ、これぐらい」

サンセットは真っ白な歯を見せて笑った。

「そうだ、これ。学校に行くと言っていただろう。魔法協会の学校に通うといい。僕が話を通しておこう」

入学届を渡す。サンセットは目を丸くして、羊皮紙とアンバーを交互に見た。

「も、もしかして凄い先生なのか？」

「まあ、道具の開発になれば右に出る人はいないですよ」

「そういうことだから、ぜひとも。僕は先生だからね」

では、出発しようか。声をかけると、ビリジアンはトランクを持ち直して、「はい！」と返事をした。

「気をつけて帰れよ」

「そうしよう。ではまた、いつか」

屋敷に背中を向けて、歩き出す。花壇を抜けて、畑も抜けて。洗濯ものを干しているホライズンに手を振って。

門のあたりまできて、アンバーはふと思いついたことがあった。

「ビリジアン、帰ったら、体の鍛え方を教えてくれないかね
彼はぎよつと目を丸くした。

「先生、どうしたんですか？」

「いやなに、誰かを守る力があればな、と思ったんだ」

戦闘の知識をつけたいと思った。それをすぐ実行できる強い体も欲しい。

「先生の先生ってことになりますよね。任せてください！」
頼もしい弟子を持ったな、と一人笑う。

「ああ、そうだ」

アンバーは足を止め、杖を取り出した。そして、空中に掲げる。

杖の先から、色彩豊かな花びらが噴き出した。渦を描き、空高く舞い上がっていく。

さらば、千秋の青春と一日の生命よ！

〈完〉